



氷見まちなか グラウンドデザイン

平成 30 年 3 月

氷見市

ごあいさつ



氷見市は、先人から受け継がれてきた歴史や文化、美しい自然景観、多彩な食、湯量の豊富な温泉、温かく強い人々の絆などをはじめとした豊かな自然とその恵みに育まれてきたまちであり、市民の皆様の誰もが氷見に誇りと愛着を持って暮らしてまいりました。

この氷見のまちを、子どもからお年寄りまでのすべての皆様が安心して豊かに住み続けられるまちとして、また、氷見市を訪れていただく皆様にとりましては、賑わいと活気にあふれた魅力あるまちとして発展させていくことが、氷見市の輝かしい未来につながるものと考えております。

こうした中で、「住みたい街」、「働きたい街」、「育てたい街」の3つの基本理念を掲げ、氷見市を元気にしていくための施策を「氷見元気プロジェクト」として進めております。

このプロジェクトの中でも、市街地グランドデザインの策定は、今まさに、スピード感を持ち、オール氷見で未来を拓く設計図を描き、これを着実に進めていくことが必要であると考え、旧市民病院跡地や旧市役所跡地、市民会館敷地、旧朝日丘小学校跡地の4つの公共空地と漁業文化交流センター等の利活用方針の検討に取り組んでまいりました。

この間、様々な場において、多くの市民の皆様をはじめ、各種団体の代表者や学識経験者の皆様からいただいたご意見やご提言を踏まえまして、このたび、「氷見まちなかグランドデザイン」を策定いたしました。

皆様には、心から感謝申し上げますとともに、市民の皆様お一人おひとりが元気になり、氷見に誇りと愛着を持ち、いつまでも安心して住み続けられるまちづくりの実現のため、引き続きお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

氷見市長 **林 正之**

目 次

はじめに	1
1. 氷見まちなかグランドデザイン策定の背景と目的	1
2. 氷見まちなかグランドデザインの対象範囲	2
まちなかビジョン編	3
1. まちづくりで目指すこと	4
2. まちなかビジョン	9
公共空地活用計画編	23
1. 公共空地の活用方針と公共施設計画の考え方	24
2. 旧市民病院跡地の活用（仮称：ひみ文化交流プラザ）	26
3. 旧市役所跡地の活用（仮称：氷見まんが広場）	36
4. 市民会館敷地の活用（仮称：ひみ発見館）	44
5. 旧朝日丘小学校跡地の活用（仮称：ひみ子育ての杜）	52
6. その他の関連施設	60
7. まちなか都市デザイン戦略全体図	68
事業推進編	71
1. 庁内体制の構築について	72
2. 公民連携の推進について	73
3. 施設の設計にあたって	73
4. 施設の運営にあたって	74
5. まちなかソフト施策について	74
資料編	75
1. 策定の流れ	76
2. 市の概況	80
3. 市街地の地域特性	83
4. 公共空地活用検討の参考資料	92
5. パースイメージ	98

はじめに

1. 氷見まちなかグランドデザイン策定の背景と目的

氷見市は、「世界で最も美しい湾クラブ」に加盟する富山湾と、豊かな里山の四季折々の幸に恵まれて、独自の文化と歴史を育み発展してきたまちです。古くから漁師町として中心市街地が形成されるとともに、定置網など世界に誇れる漁法を開拓してきました。

また氷見市は、多くの来訪者を惹き付けるまちです。氷見ブリや氷見牛など全国に誇れる食のブランドを有するとともに、氷見市潮風ギャラリーは「日本のアニメ聖地 88 ヶ所」のひとつに選ばれています。観光入込者数は年々増加し続けており、平成 28 年には 2,281,100 人と過去最高を記録しています。

一方で氷見市は、他の地方都市と同様の課題も抱えています。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2040 年には人口が 32,767 人に減少し、65 歳以上の高齢者の割合も 44%に上昇する予想がなされています。また、平成 25 年住宅・土地統計調査によると、空家率は 16.1%であり、全国や県の水準を上回っています。

今求められるのは、このような人口減少やまちの空洞化などに対し、まちの活力を高める未来に向けた創造的ビジョンを描き、その方向に向かって氷見市民の知恵や力を集め、これからの時代変化に的確に対応していくことです。

氷見市の中心市街地は、これまでのまちの発展を支えてきており、多くの人々が訪れ、これからの時代を生き抜くための、多様なまちの財産が蓄積されています。これらの財産を最大限に活かして、都市の魅力と賑わいを取り戻していくことが重要です。さらに、新しい生き方や働き方を模索する風潮、脱炭素化社会、人工知能や自動運転技術の進展など、新たな時代の潮流に呼応する取り組みも求められます。

氷見まちなかグランドデザインは、これらのことを踏まえ、氷見市全域の活力を牽引する中心市街地の再生を目指し、JR 氷見駅周辺からひみ番屋街まで、市街地全体の今後の都市デザイン戦略を描くとともに、旧市民病院跡地、旧市役所跡地、市民会館敷地、旧朝日丘小学校跡地の 4 つの公共空地及び漁業文化交流センターの利活用方針を示します。



まちなか ビジョン編

まちなかビジョン編は、市街地を取り巻く課題を見据え、市民の方々とともに、これからのまちづくりの方向を共有するものです。まちなかの特性や資源を踏まえ、公共空地の存在に着目し、今から十数年後を見据えて、魅力と活力のあるまちを形成するため、まちづくりの目標、視点、方針と公共空地等の利活用方針を示すことにより、今後の都市デザインの指針とします。



© 藤子スタジオ

1. まちづくりで目指すこと

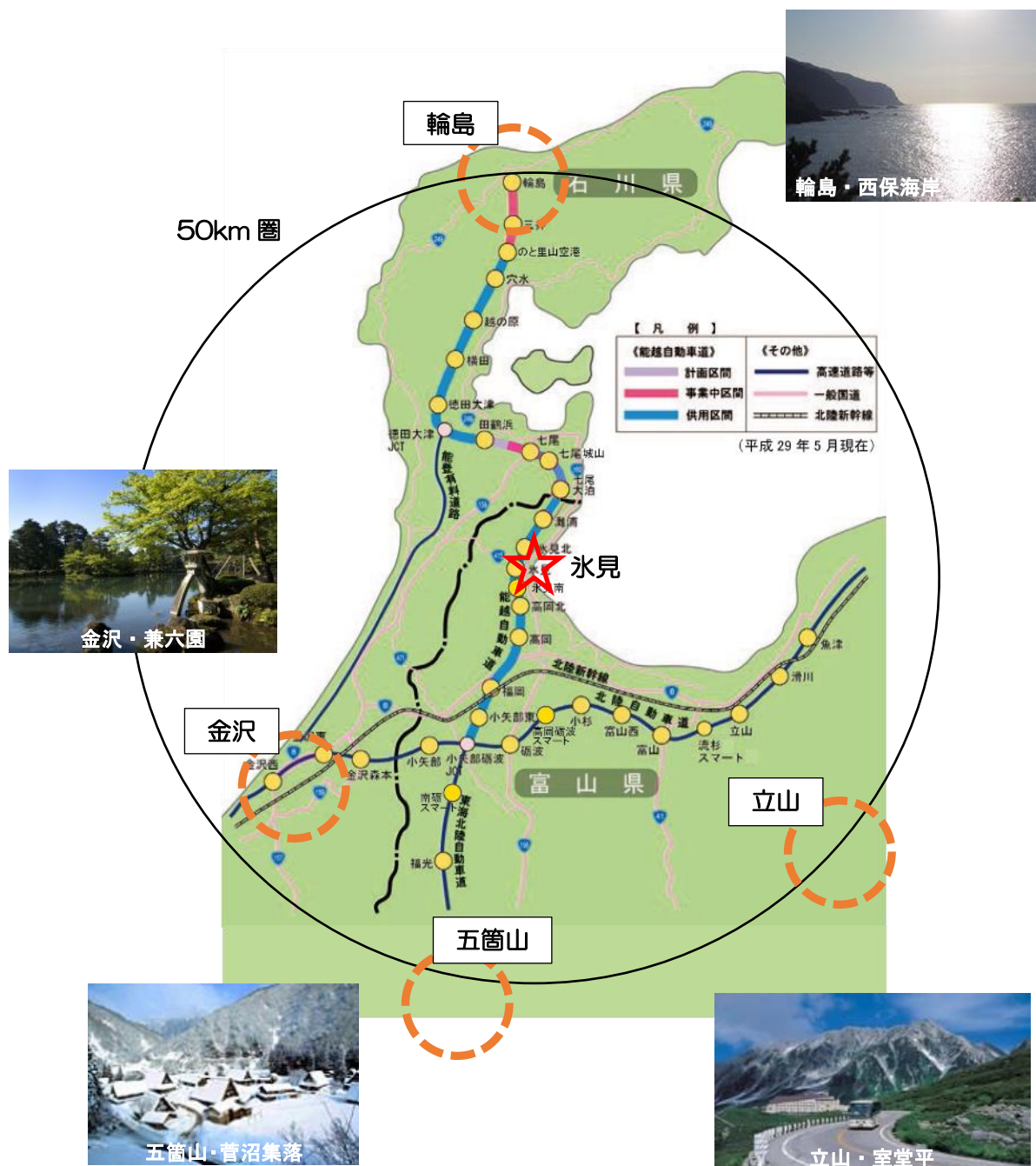
(1) まちなか市街地の位置づけ

1) 氷見市の広域的な位置

氷見市は、富山県の北西部、能登半島の基部に位置し、能越自動車道や国道 160 号、国道 415 号、JR 氷見線などにより、広域的に結ばれています。

観光的な観点からは、概ね 50km 圏域に存在する、金沢、立山、輪島、五箇山という全国的な観光地に囲まれた中で、氷見市の独自性を高める必要があります。

<氷見市の広域的な位置>

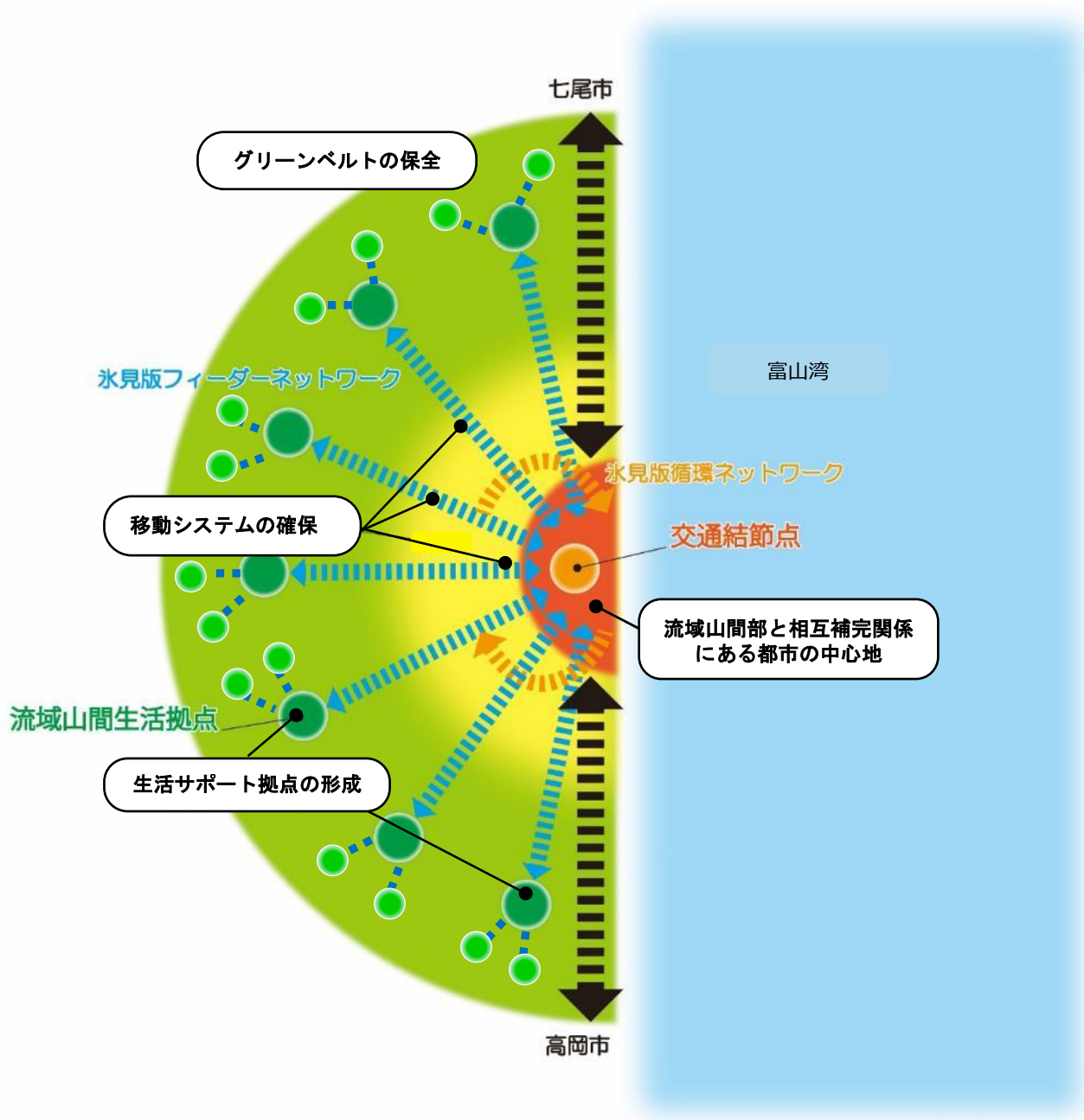


2) 市全域におけるまちなか市街地の位置づけ

まちなか市街地は、7つの流域沿いに形成された集落と相互補完関係にあり、交通結節点となる都市の中心地として、市全域の発展を牽引するエンジンになっています。

市全域のまちづくりの持続可能性を確保するためには、流域山間部における居住環境の維持、集落の生活ニーズやコミュニティに対応する生活サポート拠点の形成等とともに、まちなか市街地での商業・医療・福祉・文化など都市的生活の利便性の維持・向上により、まちなか市街地と流域山間部等を結んだ、交流を生み出すまちづくりが必要です。

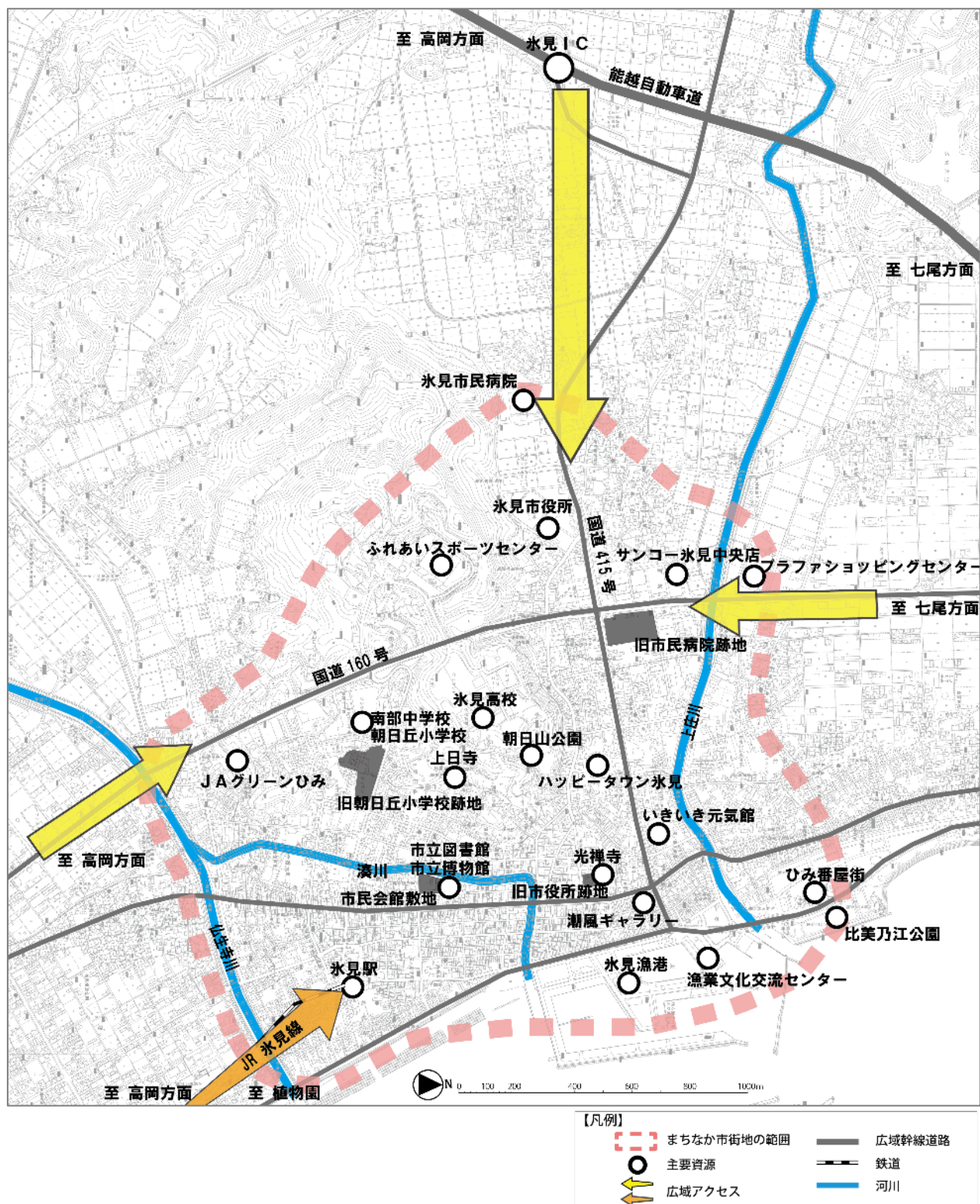
＜市全域におけるまちなか市街地の位置づけ＞



3) まちなか市街地への広域アクセス

まちなか市街地への広域アクセスは、JR 氷見線を利用する鉄道によるアクセスと能越道や国道 160 号を使う車によるアクセスの2つがメインになります。

＜まちなか市街地の広域アクセス＞



(2) まちづくりの課題

まちなか市街地の現状は、人口減少、人口密度の低下、後期高齢者の増加による住民の高齢化、若年層の郊外への流出、市民病院や市役所の移転等に伴う市街地の空洞化などの問題がみられます。

また、年間約 120 万人を集客する、ひみ番屋街の来館者が十分にまちなか市街地へと引き寄せられていません。

このような現状の問題点の解消に取り組むとともに、今後とも氷見市の発展を支えていく役割を踏まえて、「4つのまちづくりの課題」を示します。

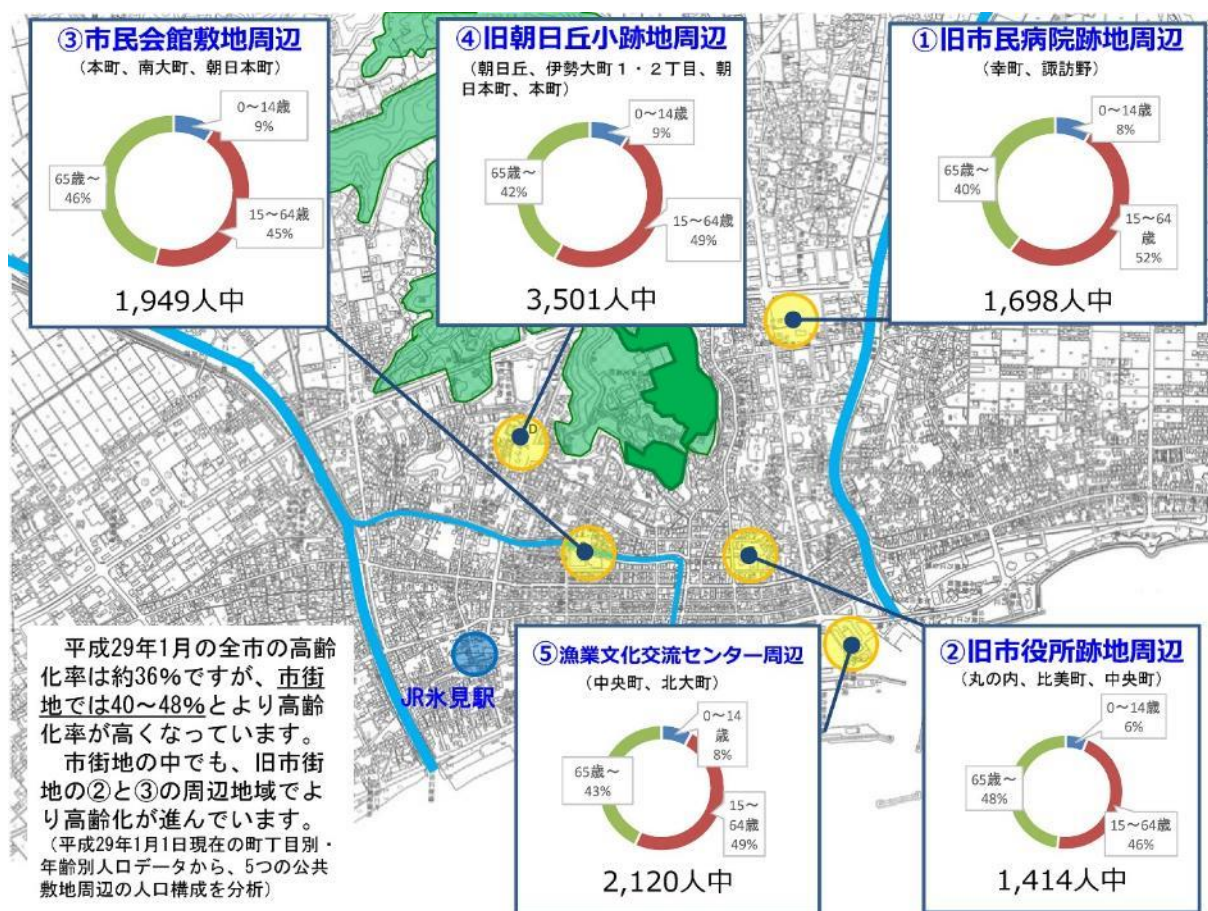
○中心市街地の都市活力の維持・向上への対応

○安心して暮らし続けられる日常生活圏の充実

○住まい・子育て環境の向上、職の創出による「まちなか居住」につながる魅力形成や利便性の向上への対応

○まちなかへの誘客や回遊性の向上への対応

<各公共空地周辺の高齢化率>



(3) 総合計画による位置づけ

第8次氷見市総合計画・後期基本計画（平成 30～33 年度）において、中心市街地は、商店街の経営者の高齢化や後継者不足による商業機能の低下を踏まえ、こだわりと特色を持った店舗づくりや SNS の活用等による販路拡大を支援するとともに、空き店舗の有効活用にも努め、商店街全体の魅力の向上を図ることとしています。

また、中心市街地が定住人口の減少に伴い空洞化が進行していることに対しては、各種イベントの開催やまちなみの整備等を行うことで、観光客とのふれあいや多世代の交流を促進することと合わせて、まちなかでの居住を促進し、中心市街地の活力維持と活性化を図ることとしています。

(4) まちづくりの目標

まちづくりの課題と総合計画・後期基本計画による位置づけを踏まえ、氷見市の将来に向けて、市全域の発展を牽引する、まちなか市街地における「3つのまちづくりの目標」を示します。

○市の発展を牽引するにぎわいのまちづくり

市の中心部から市全体に経済活動が波及し、にぎわいある市の中心部が市全域の発展を牽引するエンジンとなるまちづくりの推進

○多世代において魅力があるまちなか居住環境の形成

高齢者が安心して生活ができ、若年層にとっても子育ての利便性や文化・にぎわいなどの魅力があるまちなか居住環境の形成

○市内外の交流と活力創造の核となるまちの顔づくり

市内外の交流と活力の創造の核となる「まちの顔」の創出により、氷見市民が愛着と誇りをもって住み続けられる郷土づくりの実現